情報局編輯 十二月六日・第三五〇號

寫眞週報

時の立札

戰爭第四年
決戰の頂點には
大東亞戰爭の必勝と
大東亞の解放がある
われらこの凱歌を確信しつゝ
侮らず　怯まず　ひたに勵む

北ボルネオの西海州一帶には、米作に適する廣濶な耕地が限りなくある。戰前は、原住民が原始的な耕作法で僅かな收穫をあげ、あとは放置されてゐたが、現在ではわが本島青年指導者の汗と努力が結實して水田はのび、二毛作の蓬萊米が黃金の穗波をうたせてゐる。最初はあまり協力しなかつた原住民も、いまでは現地自給を目指して奮鬪してゐる。豐かな收穫に頰ずりする原住民の笑顏。これこそ戰爭三ケ年の大きな稔りだ　撮影　寫眞報道班員

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

情報局編輯 十二月六日・第三五〇號

婦人週報

時の立札

戰爭第四年
決戰の頂點には
大東亞戰爭の必勝と
大東亞の解放がある
われらこの凱歌を確信しつゝ
侮らず　怯まず　ひたに勵む

北ボルネオの西海州一帶には、米作に適する廣濶な耕地が限りなくある。戰前は、原住民が原始的な耕作法で僅かな收穫をあげ、あとは放置されてゐたが、現在ではわが本島青年指導者の汗と努力が結實して水田はのび、二毛作の蓬莱米が黃金の穗波をうたせてゐる。最初はあまり協力しなかつた原住民も、いまでは現地自給を目指して奮闘してゐる。豊かな收穫に頬ずりする原住民の笑顔。これこそ戰爭三ケ年の大きな稔りだ　撮影　齊藤報道班員

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

⇧必殺の意氣物凄く、次ぎ〳〵舞ひ上つてゆくわが陸軍新鋭戰闘機

明朗敢闘

四度 十二月八日を迎へ

大本營陸軍報道部

★ ★ ★

大東亞戰爭開始以來、既に滿三ケ年。今や比島周邊における彼我の本格的決戰まさに最高潮に達せんとしつゝあるの秋、過きしを顧み來るべきに備へ、以て征戰の一途に邁進せねばならない

實戰の諸動作にも『帝國ハ今ヤ自存自衛ノ爲蹶然起ツテ一切ノ障碍ヲ破碎スルノ外ナキナリ』と仰せられてあるやうに、この戰爭は敵米英の餘りにも非道不當な壓迫によつて開始せられたものであり、わがその存立上、寓やむを得ずして起つた絶體絶命の戰ひであつた。從つてこの敵を撃滅しない限り帝國の存立はなく、大東亞諸民族の自由獨立もあり得ない。それは『勝利か然らずんば死あるのみ』の徹底的な戰ひである

★ ★ ★

思へば過去三ケ年の間の戰局は大きな變轉を示してゐる

すなはち、開戰第一年目はまづ輝かしい勝利の年であつた。『われらまづ勝てり』との歡寓、との自信が、どんなにか國民の士氣を奮ひ立たせたことであらう。一億國民の胸奥にやがてわれらこそ敵米英の野望を壊滅し得る光榮の民族であり、われ等こそ東亞保衛の唯一の當事者であるとの信念が固く根を張つたのである。いはゞとの年は戰勝の決定的要素たる必勝の信念確定の年であつたといふべきであらう

次いで戰爭第二年目に入るや、わが南方占領地區の豊富な資源の戰力化が軌道に乗り始めた。國内においても着々進められてゐた生産の決戰體制化が逐次具體化した。この間、前線にあつては、わが攻勢終末點たるソロモン、ニューギニア方面將兵の健闘、或ひはアッツ島における山崎部隊將兵の死闘など、いづれも、戰爭途上の至難な國内態勢轉換、全局的戰力擴充の前の尊い時を稼いだのであつた。從つて第二年目は戰時生産態勢確立の年とみることができるのである

次いで第三年目に入ると戰勢はこゝに急變し、敵は『短期決戰』の方針の下、老大な消耗を厭はず、しきりに基地の推進を焦り、遂に比島上陸の强引な作戰によつて、わが國に對し本格的な決戰を挑み來つた。この間わが國内においては決戰非常措置の實施と共に、工場への學徒動員の强化、女子徴用の實施、そして徴兵年齢の低下による決戰兵力の投入等、あらゆる施策を決戰戰力增强の一點に集中してきたのである

勇士達の鮮血をもつて勝はれた尊い『時』によつて決戰の準備を整へ、大陸の戰野に展開された雄渾極まりない大作戰によつて、在支米空軍の蠢動を封殺し、作戰の主動性を獲得した我が軍は、こゝに神機を捕捉、レイテ決戰へ臨んだ。正しく三年目は決戰準備に終始した年と呼ぶことができるであらう。しかして戰ひはこれからがいよ〳〵本格化するのであつて、去る十一月二十四日の關東地區に對する空襲等は、その單なる前奏曲に過きない。われらは現在の生活を更に切りつめ、文字通り最低生活に徹して、より一層の奮闘を誓ふべきであらう

★ ★ ★

かの南溟の孤島に殘るラバウルの將兵たちは、その四周に强大なる敵と相對し、兵器食糧を始め、あらゆる必需物資の補給を遮斷されてゐるのである。その頭上には絶えず敵機の銃撃爆撃がつき纏つてをり、地上には最早や住むべき一軒の家も殘さず徹底的に破壞し盡されてゐる。困苦缺乏の生活といへばこれほど徹底した困苦缺乏の生活はないであらう。しかも、この廢墟と化した最惡の條件の中から、將兵たちは雄々しくも立上つて活潑な現地自活の戰ひを闘つてゐるのである

家屋を破壞されるとすぐに洞窟を掘り拔いて、如何なる爆撃にも決して崩壞することのない住居とし、食糧自給のためには密林を伐り拓いて農場と化し、或ひは食用動植物の採捕に努め、あらゆる生活必需物資はすべて將兵たちの苦心によつて生産されてゐる。既に洞窟内には兵器製造の工場まで建設され、そこには煌々たる電燈が輝き、動力機械が盡菅を立ててゐるのである

最早やラバウルでは、生活必需物資で生産できないものは何一つないといふ。そして、將兵たちは『五年が十年でも最後の勝利を得るまでは頑張り拔く』と、滿々たる自信をもつて故國の人々の健闘に暖かな聲援を送つてゐるのである。そこには微塵の冷たさ、暗さも存在しない。すべては決死を乗り越えた明朗な闘魂に滿ち溢れてゐるのである

まづ精神的な面よりこれをみれば、そこには戰友愛によつて將兵の心が强固に結ばれてゐることを知るのである。例へば、糧食生産隊員が直接第一線の護りに就く將兵たちのために、或る時は自分の食糧まで提供してしまひ、或ひはまた輸送の人手不足を聞けば、高熱の病人まで飛び出して來て手傳ふといふふうに、そこには少しの利己的な考へも存在しない。一人の行動はすべて全島に在る戰友たちの運命と繋がつてをり、お互同士が扶け合ひ、庇ひ合つて眞に苦樂を共にしてゐるのである

次ぎに、必需物資調達の面からみたラバウルの將兵たちの生活は、徹頭徹尾、創意と工夫によつて成り立つてゐる。補給が斷たれた以上、生活必需物資は如何にしても自分たちの手で生産されなければならない。そこで有り合せの材料により、兵の一人々々が、熱心に工夫し、研究し、自給の目的を達してゐるのである。既に日用品から醫藥の一部、さては『ラバウル新聞』の如き文化機關さへ現はれてゐるのである

例へば、撃墜敵機の發動機は直ちに修理改造されて工場に送られ、動力機械として新らしき生産に參加し、その機體はそれ〳〵分解され、區別されて、生産資材としての重要な役割を果すといふふうに、如何なる物資であつても、創意と工夫とによつて生活必需品と化してゆくのである。こゝには最早や代用品の觀念はない。すべてが創造であり、新らしき生活形式が生れてゐるのである。ラバウルの將兵たちに學ぶべき第三は、刻苦奮闘による難局打開である

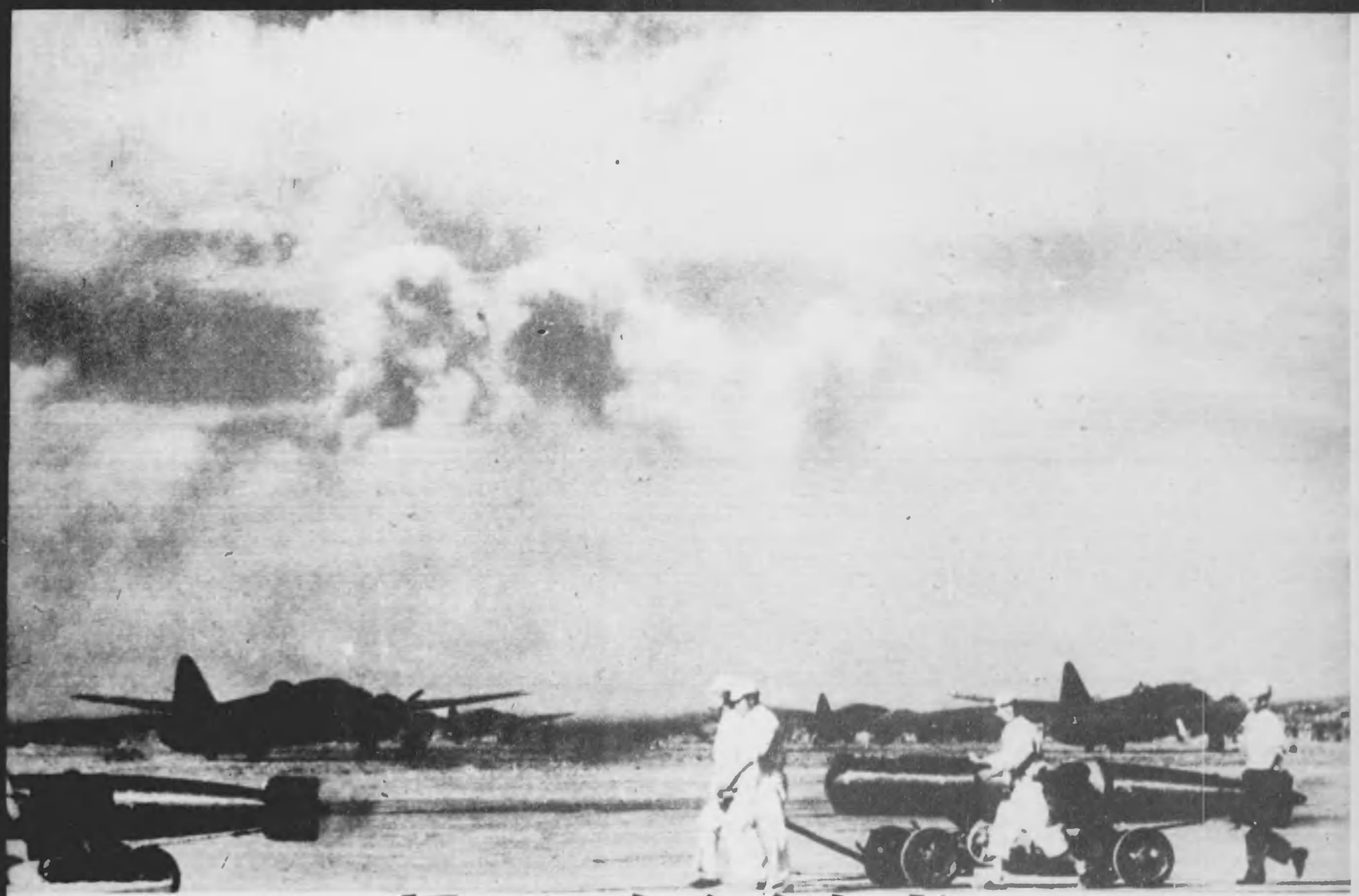
南海に孤立するラバウルにあつては、身邊に生起して來る事態の悉くが困難の連續であり、しかも、これらの問題はすべて自力によつて解決されなければならないのである。密林の開墾にしても、洞窟工場の建設にしても、それらは殆んど不可能に近いと思はれる困難な作業を、將兵の一人々々が心血を打ち込む刻苦奮闘によつて、見事に成し遂げてゐるのである。戰況逐次惡化し後方からの補給が殆んど絶望視せらるゝに至つたとき、流石の勇士達も一種のわびしさを感じたのであつたが、しかし次ぎの瞬間には忽ち『ヨシやるぞ』との烈々たる氣魄を以て逆しく立ち直つた。その日から現地資材を以てする大小新兵器の創意工作が始められた。對戰車壕、對空挺部隊施設、その他敵撃滅のためのありとあらゆる兵器、ありとあらゆる設備が日と共にその强度を加へていつた。第一線の各陣地には、はじめ『必死敢闘』の陣地標語が掲げられてあつたが、本年夏から秋頃になると、それがいつの間にやら、だん〳〵と『明朗敢闘』の標語に書き改められてゆくのが微笑ましく思ひ出されるやうになつた

今日みるラバウルの明朗な自活態勢こそ、如何なる障碍をも體當りをもつて打開してゆかうとする將兵の汗と涙の集積によつて結實したことを知らなければならない

今後、長期かつ深刻化する戰爭生活を闘ひ拔くためには、ラバウルの將兵にみる如く、決死を乗り越えた明朗さがより適切な心構へとなつたのである

すなはち、戰爭第四年目における標語は、『明朗敢闘』であるべきであらう。そしてわれ〳〵はこの明朗敢闘によつてこそ、前線將兵の體當り精神と相俟つて、輝かしい勝利への大道を切り拓いてゆくことが出來るのである

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/



⇧この魚雷が敵空母を轟沈する。敵艦を悉く屠るまで、雷撃隊は出撃に次ぐ出撃だ

撮影 鈴木報道班員

補給決戰

四度 十二月八日を迎へ

大本營海軍報道部

緒戰の大戰果

『帝國陸海軍は今八日未明、西太平洋に於て米英軍と戰鬪狀態に入れり……』

この歴史的な報道が國民の耳朶を打つたのは昭和十六年十二月八日午前六時であつた。報一度傳はるや、一億國民は敵撃滅の決意に總身の震ふを覺えたのであるが、爾來、滿三年——太平洋戰がいよ／＼決戰の段階に突入し、第四年目の開戰日を迎へんとして、感激いよ／＼新たなるを覺ゆるのである

こゝに開戰以來の大東亞戰爭を概觀するにこれを三段階に區劃し得よう。第一は我が軍が敵を東亞の各據點より驅逐し去つて、强固なる戰略的、經濟的地盤の基礎を確立した期間であり、第二は敵が戰力の增强に躍起となり、物量に裏づけられて反撃に轉じ日本の戰略要線に肉薄し來つた期間であり、第三は比島作戰をめぐつて太平洋の潮流が逆流せんとしてゐる現在の段階である

まづ緒戰の戰局をみるに、帝國海軍においては、開戰劈頭ハワイ、マライ沖海戰に所在敵海上兵力並びに航空兵力の主力を撃碎して制空海權の基礎を掌握した。海上作戰にあつては、敵航空兵力を制壓し、海上兵力を撃滅して制空海權を確保することが第一義であるが、わが軍は先制强襲をもつて、見事これに成功したのである。かくて制空海權に基礎づけられて、わが陸海軍部隊の雄渾なる協同作戰は各地に展開され、グアム（占領一二、一）、ウェーキ（一二、二三）をはじめとして、香港（一二、二五）マニラ（一七、一、二）、シンガポール（二、一五）よりスマトラ、ボルネオ等の敵根據地、要點を逐次攻略し、昭和十七年三月九日にはジャワの敵も無條件降伏するに至つた

この間ジャワ沖、バリ島沖、スラバヤ沖、バタビヤ沖等の各海戰が生起し、敵海上兵力に潰滅的打撃を與へたのである

敵米の總反攻

かくて戰前、敵が不敗を誇つた對日包圍の鐵鎖は、僅々四ケ月にして寸斷された。そこで我が方は戰略的には戰前の守勢より攻勢に轉じ、經濟的には被封鎖より自存自衛態勢の基礎を確立したといひ得るのである。だが、わが方はかゝる態勢で滿足すべくもなかつた。すなはち、わが海軍は前記の有力な足場を確保すると共に、機を逸せず新たに進撃態勢をとつた。昭和十七年四月上旬を期して敢行されたインド洋作戰、六月上旬火蓋を切つた東太平洋作戰の新展開がこれである

インド洋作戰の開始にしても、アリューシャン列島並びにミッドウェー急襲による東太平洋作戰にしても、必勝態勢を强化するものであるが、わが制空海權はかくていよ／＼増大强化されていつた。かゝる作戰と前後して、海陸協同の下にわが作戰線はソロモン群島ガダルカナル島方面へも伸び、敵アメリカが最後の恃みとする米海運綜線をすら脅威するの態勢を示しつゝあつた

一方、敵アメリカにあつては、眞珠灣に痛撃を受けた瞬間から『眞珠灣を忘れるな』を合言葉として、國民總蹶起したのであるが、とに航空機の偉力を敗者の立場において滿喫した彼等は、航空機、航空母艦を中心とする戰力增强に必死となり、米濠運綜線の危機に瀕するや、これら增强された戰力を擁して反撃に出て來た。昭和十七年八月上旬のガダルカナル島への出撃がそれであつた

爾後、敵はひたすら物量にものをいはせて進出を圖り、とにわが軍がガ島より轉進した昭和十八年二月以來といふもの、中部太平洋を狙ふニミッツ軍、ニューギニア島を西進するマッカアーサー軍、ソロモンを北上するハルゼー軍が轡を並べて進撃、その間ソロモン海域における數次の大海戰、ブーゲンビル島沖、ギルバート諸島沖數次の海・空戰等が展開され、敵は深刻な打撃を蒙つたのであるが、本年五月二十七日には、遂にニューギニア島方面の重要據點ビアク島に上陸、越えて六月十五日には中部太平洋の戰略要點サイパン島に上陸し來つた

かくて、太平洋戰局は開戰以來、最重大なる樣相を呈し、決戰的要素を內包するに至つたのである

太平洋戰の新局面

勢ひに乘る敵は九月十五日ペリリュー島、モロタイ島に進出、こゝに比島作戰はいよいよ本格化するに至つたが、敵の狙ひが日本本土と南方資源地帶の遮斷、及び日本本土攻撃の一大據點を奪取するにあるは蔽ふべくもない。かくて敵は戰勢を一擧に決定せんとするものの如く、十月十日南西諸島、十二日臺灣へと大擧出撃し來り、わが軍の猛撃に遭つて潰滅的打撃を受けた。だが彼等の既定方針は變更されるべくもなく、同二十日には約三ケ師團を比島中部のレイテ島に上陸せしめ、二十四日より二十六日に亘つては、フィリピン沖海戰が戰局して、彼等の痛手はいよ／＼深刻なものとなつた

だが、敵の戰力並びに戰意は些かも輕視を許されない。既にレイテ島の敵兵力は、その後增强されて約七ケ師團に上り、彼我の攻防戰は日と共に苛烈化し、『太平洋戰の天王山』たるの樣相を示してゐる。とに同方面制空權の歸趨は今後の戰局を左右する前提要件なるをもつて、制空權の爭奪戰は熾烈を極めつつある。しかして、消耗の補塡、戰力の補充の强弱良否が、直ちに戰局に影響するはいふまでもないところであつて、比島をめぐる現戰局は、一面『補給決戰』ともいひ得るのである

ところで、敵は比島方面に有力なる航空基地を有せず、制空權の確保意に任せないのに加へて補給もまた困難であつて、敵にとつて深刻な惱みであるに違ひない。これに對してわが方は、物量なほ彼に及ばずといへども、天與の地理的優位性を堅持し、敵を撃碎しつつあるのであるが、戰鬪は正に鎬を削る大接戰である

太平洋の潮流は逆流せんとしてゐる。いや是が非でも逆流せしめねばならぬのだ。今こそ味方の弱點を補强、整備すると共に、敵の弱點に殺到して死命を制しなければならぬ。彼我輸贏の決戰場が比島であるとすれば、こゝに決戰兵力を集中することが戰勝の鍵を握るものであり、比島に敵を撃滅することが直ちに日本本土防衛を意味することを銘記すべきである

『億兆一心國家ノ總力ヲ擧ケテ聖戰ノ目的ヲ達成スルニ邁進ナカラムコトヲ期セヨ』

一億國民、聖旨を奉戴し、今こそ各自の心に神風精神の實踐を誓ひ、敵撃滅に總突撃しようではないか

海の若樹は出撃に必死必殺の鬪志を燃えたたせ戰を決す

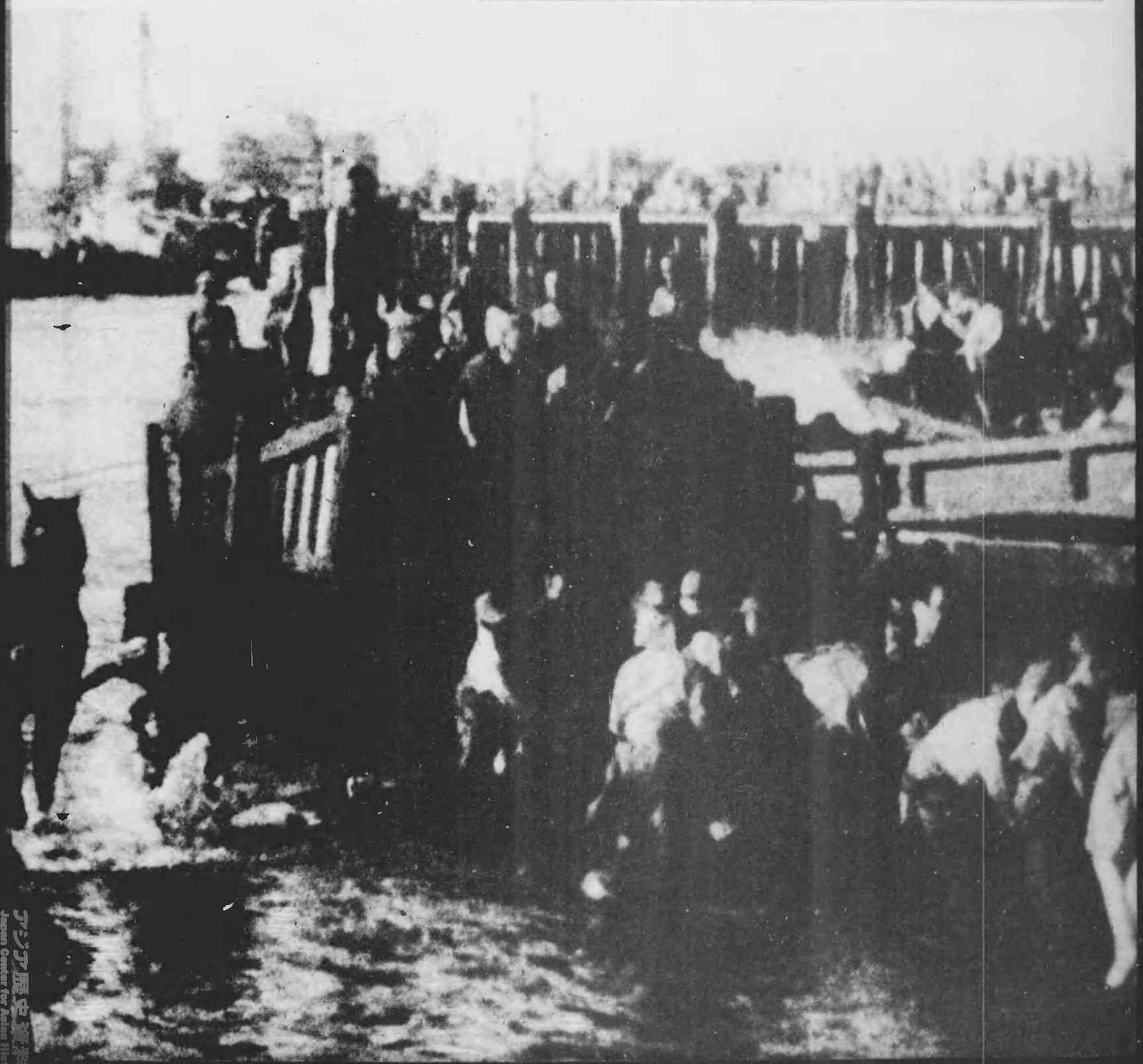
アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

レイテの死

レイテは渡されぬ！
皇國の興廢にかゝはるからだ。斷じてレイテは……特別攻撃隊の勇士も、陸上で敵を邀へ撃つ勇士も、たゞこのことのために、死生を超越した闘魂を奔騰さ

➡ 出撃を前に神風特攻隊勇士に烈々の訓示を與へる福留指揮官

レイテへ、レイテへ。わが新鋭部隊續々と上陸　撮影　日本映畫社 ⬇



アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

死闘に続け

せてゐる。われらもこの闘魂に續かねばならぬ。飛行機を、兵器を船を、レイテに送るのだ。決戰々力をレイテに注がねばならぬ。さうだ。レイテは斷じて渡してはならぬ

➡ レイテ島のジャングルを突進するわが勇士　撮影　本村報道班員

⬅ わか子のやうに　陸軍特別攻撃隊の荒鷲を激勵する富永指揮官　比島○○基地

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

決戰に立つ大東亜

あくまでも戰ひぬいて、東亞から米英を一掃することとそが、同志と共に廣東の白雲山麓に眠る汪主席に對する何よりもの餞(はなむけ)であると、いま中國の國軍は悲しみのうちにも元氣一杯、鍛へに鍛へぬいてゐます。米式化されて完全に米英の手先となつた重慶軍にひきくらべ、東亞の傳統(ながれ)の身を殺して仁をなす精神をわが皇軍の神風隊に學び、若き陳公博軍事委員長の下に集ふとれら精鋭(すぐれ)の頼母しい姿が、同生共死の東亞をまざ〳〵と示してゐるではありませんか

地の果までも敵を追ひ散らす氣魄をとめて、曠野に猛訓練をつゞける中國陸軍歩兵部隊　撮影　同盟通信社

南方の各地では、大勢のインドネシアの若人が海員養成所や工員養成所などで技術を學んでから、海員や產業戰士となつて、天晴れ日本に協力してゐますが、かうした頼母しい若人の先頭に立つてゐるのが、海軍兵補學校の生徒です。わが無敵海軍の傳統を受けついで、立派な海のつはものになるのだと、張切つて月月金金の猛訓練にいそしんでゐます

⇨ 凱く軍艦旗を先頭に颯爽の行進

『これが僕らの取つておきのうれしい顔です。僕らがどんなによろこんでゐるか、察して下さい』 ⇨

『嘗てロシア兵のため獸畜のやうに虐使された滿洲の支那人は、無蓋車に積まれて、優小な日本兵に看視されながら送られる無數のロシンドでは明治天皇の御眞影が家々の神棚に飾られ、日本を東亞の盟主と仰ぐ氣運は、獨立運動となつて燃え上り、遠くエジプト、ペルシアに仰ぎ、東亞の宿敵撃滅へ邁進してゐるのであつて、敵アメリカでさへ、東亞を今までのやうにわがものにできなくなつたことを歎い

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

シア兵を目撃して、これまで受けてきた人種的な差別待遇が理由のないことを知つた』と日露戰役の從軍記の中で一外人が書いてゐるこの言物教訓は、歐米列强に虐げられるに任せてゐた東亞の諸民族を目覺めさせた。イシャ、トルコにまで及んだ

大東亞戰爭こそは、わが國にかけられた東亞諸民族のこの信頼に對して、わが國が雄渾な事實をもつて答へたものである。さればこそ東亞の各國家、諸民族もまた日本を頭首としてゐる

戰爭三ヶ年の收穫は、無限の寶庫が開發され戰力化されてゐることだけではない。東亞十億の民心が我れに歸してゐるといふ事實、これこそが何よりも勝利の礎なのだ

⇧スマトラ軍當局では、スマトラ義勇軍が昨年建軍以來、切磋琢磨の甲斐あつて今や名實ともに東亞防衛の一翼を擔ふに足るにいたつたので、義勇軍の中から心技ともに優秀なものを選拔して將校に任じ、その指揮に當らせることになりました。寫眞は、任官式で、烈々郷土防衛を宣誓する義勇少尉

獨立の公約と共に、ジャワ防衛義勇軍の意氣はさらに揚りました。郷土の防衛は必ず自分らの手でと、眉宇に漲る決意も逞しい

撮影　ジャワ軍政監部宣傳部

そして今日愈を飾つて晴れの郷土訪問。出迎への人々の中を郷土兵は船着場から堂々の行進です ⇦

北ボルネオのダイヤ族は勇氣と慓悍で聞えた種族ですが、一度皇軍が上陸するや、すつかり敬服し、忠誠を誓ふものが續出しました

現地軍でもいたく感激し『それでは郷土の防衛をまかせてみよう』と郷土兵の募集を始めたのでした

それから一年、嚴格ならちにも親切な皇軍勇士の教育で、立派に一人前になつた彼らは、決戰いま來兵來らば來れ、と大はりきりです

撮影　坪内報道班員

人情は大東亞みな一つです。久し振りに愛兒を抱いての喜び ⇨

わが軍の凱壁にひたるのも幾月ぶりぞ。再び歸り來ん日には必ず功を、と語り合ふのも頼もしい

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

漫画文芸　盲目を焼く

（五十音順）石坂洋次郎　海野十三　大谷藤子　サトウハチロウ　濱本浩

當分の間、本欄を執筆される、のは、次ぎの諸氏であります

マカッサル市郊外の、椰子やマンゴーやパンの木など立木の多いこの村へ、昨日、マカッサル市を占領した海軍特別陸戦隊の武装兵が入つてきた

それを道路にゐて發見したインドネシヤ人が

『ニッポン！ニッポン！』

と叫んで駈けると、日本古代の建物にそつくりな千木を屋根に見せてゐる家々から、ソンコ帽をかぶり腰にサロンを卷いた村人が道路へ飛びだしてきた

『この村に、豚はゐないか、豚は！』

陸戦隊の兵はギラ〳〵光る銃劍をひつさげて、道路に立つてゐるインドネシヤ人に近づくと、日本語でさういつた

東印度諸島に棲んでゐるインドネシヤ人は、馬來語でないと通じないことは知つてゐたが、眼の色も容貌も日本人そつくりなので、日本語でも通じさうな氣がしたのだが、はたして通じたらしい

『ブタ？』

インドネシヤ人がソンコ帽の下で眼をみはつて訝るやうに訊きかへした

『さうだ、豚だ、豚はゐないか』

陸戦隊の兵が豚に力をいれていふと、インドネシヤ人は首肯いたが、首肯いた後の言葉がサッパリ分らない

言葉は分らなかつたが、顔の表情や手ぶりなどで、豚はゐるがどうするか……と尋ねてゐるらしい

そこで糧食の徴發を急いでゐる陸戦隊の兵が、日本語と手眞似とで、豚は焼いて食べるのだといふと、そのインドネシヤ人も、群がつてきてゐたインドネシヤ人たちも颯と顔色をかへ、妙な聲をあげ、口に何かいひながらバラ〳〵ッと逃げだした

馬來語で『ブタ』は盲目のことであつて、この村に盲目はゐるとこたへると、日本軍の兵が焼いて食べるといつたので大騒ぎになつたのだつた

ノビるアメリカ　伸びゆく日本

石川進介

☆大東亞戰爭宣戰布告

☆戰爭第四年目決戰期

☆そして……

神風とV2號　東西に下された天誅！　石川進介

國民映画

陸軍　松竹作品

➡ 慶應二年、山縣狂介、高杉晋作の奇兵隊の華々しい活躍に心をうたれた高木友之丞は、それから三十年後に日清戰役の大勝利が奇兵隊を礎としてゐることを悟り、一子友彦を軍人に育てようと深く心に決した

しかし友彦は日露戰役に出征したものゝ、病のため退役し、死んだ父の志を果せなかつたがその子伸太郎は立派に軍人となり上海事變を迎へたこのころ、友彦は櫻木製作所で働いてゐたが、その櫻木と喧嘩別れしてしまつたので、伸太郎は戰友である櫻木の一子常吉の心を汲み、父と櫻木とを和解させたが、やがて伸太郎にも晴れの出動の日が來た……

明治、大正、昭和の三代に亘つて、軍人の家庭における生立ちを描いて、輝く皇軍の傳統を明らかにしたこの映畫こそ、國民の必見に値ひするものである

雷撃隊出動　東寶作品

兵學校時代『ワシカミ』とよばれた雷撃攻撃隊指揮官村上少佐と戰隊参謀川上少佐、基地攻撃隊指揮官三上少佐は、南の基地で久し振りに邂逅したが、悩みは同じく飛機の不足であつた

しかし、やがて補給の日が來た。敵機動部隊大舉出動の報に接し、航空母艦に降投の村上隊は勇躍出發、基地の三上少佐もまた常々の大編隊を組んで出撃した激戰は熾烈を極めた。黒煙をはきつゝ村上機は敵空母一番艦に體り込み、三上機も火達磨となつて敵空母の司令塔に自爆した。この戰果を知つた川上は、雷撃隊精神に心から首をたれるのであつた

『ハワイ、マレー沖海戰』、『加藤隼戰闘隊』と共に三部作をなせるこの映畫は、一撃必中、勇猛果敢な實行力を神髄とする雷撃隊精神を遺憾なく發揮する一方、藝術味深い戰爭映畫としても廣く國民に一見をすゝめる ⇦

寫眞週報
（禁無斷轉載）
昭和十三年二月十二日第三種郵便物認可
昭和十九年十二月六日發行　毎週一回水曜日發行
定價一部十錢（送料一錢）
編輯者　情報局　東京都麴町區霞ケ關一ノ二
印刷者 發行者　印刷局　東京都麴町區大手町
申込所　全國各地官報週報普及部　書店、驛賣店、新聞販賣店

本誌を壁新聞や掲示板に回覽や前線慰問にも

本誌を讀まれた後は、隣組や職場で回覽するばかりでなく、表紙や見開きの寫眞頁を、職場や校庭の掲示板などで「壁寫眞新聞」として是非活用して下さい。戰時版の狙ひもこゝにあります。また前線慰問にも送つてあげて下さい